

暁に発すあかつきはつ（月田蒙齋つきたもうさい）

残月のざんげつ 滴露てきろ 人のひと 袂をたもと 湿すうるお

暁風ぎようふう 髪をはつ 吹いてふ 秋冷をしゅうれい 覚ゆおぼ

忽ちたちま 驚くおどろ 大蛇のだいじゃ 路にみち 当つてあた 横たわるをよこ

剣をけん 抜いてぬ 斬らんとき 欲すればほつ 老松のろうしよう 影かげ

残月滴露湿人袂 暁風吹髪覺秋冷  
忽驚大蛇當路横 拔劍欲斬老松影

解説 一八三三年八月に江戸から故郷に帰る途中、浜松付近で作られた詩。

語釈 ※暁発||朝早く出発すること。※残月||明け方の月。  
※滴露||したたる露。※湿||ぬらすこと。※暁風||明け方に吹く風。※秋冷||冷え冷えとする秋の冷氣。※忽||ふと気がつく。 ※当路||道みちを遮さへぎるように。

通釈 月が西の空に残る早朝に出發すれば、したたる露たまが袂たもとをしつとりとぬらしている。明け方の風が髪を吹いて、はやくも、ひんやりとした秋の気配が感じられる。ふと見れば、巨大な蛇がゆくての道をさえぎるように横たわっているではないか。すわ、と刀を抜いておどりかかって退治しようとしたが、よくよく見れば、それは年を経た松の影であった。